

記念論文 目指すべき30年後の「農村のかたち」と 農村振興技術者の役割



すすき まさし
薄 正士
株式会社
ルーラルエンジニア

2047年7月12日、金曜日。
午後6時半。

「まったく！いつまで降るのよ！」
雨の叩き付ける窓を睨みながらミ
キは吐き捨てた。まだ日暮れには
時間はあるのだが、ぶ厚い雨雲に
覆われた空は暗く、狂ったように
雨を降らせている。

明日の土曜日はミキの十八回
目の誕生日だ。「昨日学校から帰る
までは、いい天気だったのに：明
日は晴れるのかな：？」

テレビの天気予報を見そびれ
たのだ。

* * * * *
ミキの住む町は、北海道にある
新興住宅地だ。隣接する大都市か
らは、電車で二駅。だが、周囲は
ほ場に囲まれている。ここ数年で
大きな会社が何社も立上り、活気
を帯びて来た。ミキの通う学校は、
大都市にあり、通学列車はこの社
員の子供たちで、結構混雑してい
る。ミキと逆方向の電車は、大都
市に住む人達が、大挙してこちら
の町に向かっている。ミキの町が
大きくなったのは、その社員たち
が、徐々にミキの町に家を持つよ

うになったからだ。田園回帰と言
うらしい。この会社は、農業法人
とか言う会社で、農業が主たる業
務だ。社員たちはそこで、作物セ
ンサーの値のチェックや機械の整
備、施設のメンテナンス等をやっ
ていて、「畑や会社には毎日に行か
ないヨ」と父に聞いた事がある。
父は土地改良区の技師長を勤めて
いる。だから、農業のことは随分
と詳しく、作物の生育状況、収穫
の時期は勿論、道路や川の事、こ
の町の作り方まで、実に色々な話
を知っている。ミキも子供のころ
から両親の話を何となく聞いて育
った。話の内容は理解できなかつ
たが、どうやら建築士の母と仕事
の話をしているらしい事は解った。

* * * * *
昨日もおとといも、ミキは母方
の祖父の暮らす老人介護住宅に
遊びに行っていた。祖父の住宅
は、この町の外縁部で、ほ場に近
いところにある。大きな建物が何
棟も建っており、沢山の人が暮ら
している。祖父のおしゃべり
は、昔話が多いけれども、ミ
キの生きる時代と違って、ゆった

りとした話が多いように思える。
色々な失敗談を面白おかしく聞け
るのも楽しい。話が盛り上がりつ
てしまえば、夕方の天気予報を見そ
びれたのだ。今日は雨がひどいから、
真直ぐ帰宅して、両親の不在を良
いことに、音楽ソフトをむさぼる
様に見ていた。だが、稲光が窓を
照らしたため、何となく興ざめし
た。
まったく最近の天気予報の精
度はすばらしい。24時間前には、
雨の降る時間帯や降雨量まで、実
に正確に予測してくれる。過去の
干ばつや大雨など、天気が極端化
する中で、気候変動を考慮した予
測が可能となったと数年前にテレ
ビで見た。
おととい帰宅した時の夕食の
場で、父と母が「明日と明後日は、
要注意」と言っていたのは、この
事だったのネ。遅まきながらミキ
は気がついた。
* * * * *
「ネットに聞いてみよう。メビウ
ス！」と、ちよつと強めの口調で
言った後、「今日の天気は？」と続
けた。「19時30分マデノ、24
時間降雨量ハ、240ミリ」との
こと。「それ以後ハ、雨ハ止ミマ
ス：」家庭用のAI「メビウス」
が答えた。「7時半には止むの
ネ。：よかった。」
ミキはこの町が気に入ってい
る。友達も多いし、買い物も便利
だ。祖父の住宅の近くにも病院
やスーパーがあるし、プロが試合
する野球場や、サッカー場など
スポーツ施設も充実している。何
より、家の二階の窓から見える広
大な畑は、季節に応じて様々な様
子を見せてくれる。大型のトラク
ターが24時間、整然と動き回り
、植え付けから収穫まで行うのだ
が、その間に、色とりどりの花を
咲かせる。土の匂いと花の香りが
風に乗ってくるのも好きだ。そう
言えば、昔はトラクターに人が乗
って操縦していたらしい。今では
完全に無人化していて、収穫した
後も工場まで運び、これまた全自
動で洗浄から品質チェックや選別
まで行っている。しかも、静かだ
。全て電気と水素のハイブリッド
だ。

「農業ってラクなのかしら？」以前、素朴に疑問に思ったことを父に聞いたことがあった。父は笑って、「それでも、なかなか大変なんだヨ。結局、僕たちが食べる食べ物を作っているんだから、安全・安心でなければならぬんだ。そのためには、色々なリスクを排除しなければならぬ。機械のメンテナンスや、収穫適期の見定めなど、データを分析することも大事だし、それに：」私の何気ない一言が、父の職業人のスイッチを入れてしまったようだ。母と目が合うと、母も笑って、

「そうよ。お父さんの仕事って、とっても大事なよ。だって、この町のどこに、どんなパイプや川があるのか、どんな状態なのか、それにどれ位の雨なら災害にならないとか、作物の生育状況とか色んな事を管理しているんだから。」あらあら、母のスイッチも入っちゃった。

「私の会社の住宅建設も、お父さん達と連携して、宅地造成などをやっているのヨ。ねえ、お父さん。」母はこう見えて、小さな建築会社の社長だ。

「そうだね。お父さんは、作物を作らないけど、作物を作る環境を

整えているんだ。ミキのおじいちゃんの時代には、測量や設計が大変だったようだが、今は衛星からの画像データの精度が上がって、測量も設計も3Dで格段に早くできるようになった。でも現地に適した使いやすい設計を行うことも大事なんだ。AIが行った設計は、まだ、不十分な箇所があるからね。」

「ハイハイ、解りました。じゃ、勉強してきまうす。」長い話になりそうだったのを、何とか切り抜けた。そんな事を思い出しながら、止む気配の無い雨を見ていた。

* * * * *

時刻は7時。「お父さんもお母さんも大丈夫かしら。」そう思った時、父の車が玄関に着くのが見えた。

「おっ、一人お帰りねッ。」でも、意外だ。母よりの父の方が早いことは珍しい。逆に母のことが、一層心配になった。

「お父さん、お帰り。大丈夫？」「ただいま。ホウ、心配していただけとはありがたいね。」

「何言ってるの。それより、お母さんがまだ帰ってないのよね。」一瞬、父の顔が曇った。

「そのようだね。車が無い。」

「お母さん、何処に行ったの？事

務所じゃないの？」

「午前中に、建築中の現場の様子を見に行くと連絡があったけどね：連絡してみよう。」母は、現場に行っていたのだ。いつも自宅や事務所勤務が多いから、まさかこんな雨の日に現場に行くとは思っても見なかった。

「変だな。モバイル端末に応答しない。」

「ええ。どうして？」

「判らないよ。もう少しで雨が上がるし、現場の場所も知っているから、見に行ってみるかな。」

「私も一緒に行くワ。」

「フフ、そうか判った。」

「ねえ、お父さんも仕事で現場に行ったの？」

「ああ、今朝一番で、頭首工の水位計を調整しに行ったよ。昨日の夜、雨が降り始めた頃から、感覚が悪くなっていた様なので、川の水位が上がる前に点検したんだ。事務所に戻ってからは、今回の雨による影響をシミュレーションして、安全を確認していた。その後から、ものすごい雨になったので、早く行っておいて良かった。全く予報どおりだよ。線状降水帯は、台風くらい恐ろしい。」

「大変ね。」「やれやれだ。」

父の話しぶりに、少しホッとしたが、ミキの屈託は晴れなかった。父の着替えの間、持て余し気味に空を見ていたミキが「あ、雨が止んだワ。すごい。7時半ぴったり。じゃ、お母さんの所に行こうよ。」と言った。

「よし、行こう。でも、ミキ。雨が止んだからと言って、すぐに安全になるわけじゃないんだ。川の水位は、雨が止んでも上がり続ける。上流から沢山の雨が集まってくるからさ。だけど、お父さんやコンサルタントの人達が、今まで時間を掛けて、堤防の整備や排水路、道路の整備をしてきたから、この町は安心という訳だ。まだまだ手付かずの村や町があるから、そういう所では、慎重に対応しなければいけないよ。」ミキの肩に置かれた父の手は、優しく、頼もしかった。

「何度かお母さんに連絡しているんだが、応答が無い。端末は持って行ってるよね？」

「うん。そのはずヨ。」

「メビウス。ミキと一緒にお母さんを迎えに行くから、留守番を頼んだよ。」

「了解シマシタ。留守番モードに切替えマス。」

玄関を出て、車に乗り込んだ父は、今度は車の中で、「自動運転モードに切り替え。目的地。〇〇町3丁目の東の角。」と言った。「ピッ」という音と共に車が起動し、カーナビが目的地を捉え、動き出す。

「お父さん。さっき言っていた線状降水帯って？」雨は上がっているが、まだ空が暗く、すっかり夜の装いだ。父は周囲の様子に気を配っている。人通りはほとんど無い。さすがにこんな天気の日には、家で家族と一緒に晩酌が一番だな、と思いつながらミキの問いに答えた。

「30年程前から頻繁に見られるようになったんだ。こいつのせいで、降雨量は記録更新続きなんだ。同じ場所にしつこく大量の雨を降らせる。川の氾濫が起きて、人的な被害も出た。勿論、農地にも被害が出ていて、その度に作物の収量が落ちた。お父さん達は、農村振興技術者として、様々な研究成果や技術、失敗事例までも駆使し、『安心で住みやすい農村』『安全な食糧』を作ろうと努力してきた。今でも自然には勝てないことも多いけど、上手く付き合っているところさ。」

「ふーん。何だか大変ね。」
「ああ。でも危険などころには行かない。今は、衛星や無人の機械が大部分を補ってくれている。慌てず、騒がず、でも、着実に技術は進歩しているよ。」

「そっか、だからこの町も人口が増えているの？」

「うん。農業法人が立上り、メガファームが沢山できた。その中には稲作、畑作、酪農を行い、しかも、糞尿の活用や、水力・風力を使ってエネルギーも自給自足するところさ。ハウス団地もあるから、通作も出来る。勿論、積雪寒冷地仕様だ。雪冷房もある。そこへ農業の社員達だけじゃなく、農業に関係の無い人も住む様になったんだ。緑や川、色んな魚や昆虫などが住んでいる自然の空間を求めてね。」

「あら。じゃあ、私もその一人。何か、ここの風景って落ち着くのよね。」父の横顔がニヤリと笑った時、車が減速し、停止した。

「どうしたのかしら。」とミキ。
「街路樹が倒れて道が塞がっている。」
「ホントだ！」
「さっきの雨のせいかな。昨日はお母さんが通っているはずだからね。」次の瞬間、父は車を降りてい

た。慎重に周りを見渡して、再び車に戻り、ハッチバックを開け懐中電灯を取り出した。周りを照らしてから車に戻った父は、
「大丈夫、もともと傷んでいた所から折れただけのようだ。巻き込まれた人もいないようだしね。しかし、車は通れないから、迂回しよう。役場と警察にも連絡しなれば。」と言った。

父は冷静に、「迂回路検索。」と言うと、「ピッ」という音がしてカーナビの予定進路が切り替わった。続いて「役場と警察のHPの障害物連絡ページにアクセス。現在地データを入力。」で、たちまちフォーマットに入力完了した。

本当に北海道の殖民区画は、素晴らしい。迂回路を見つけるのは、子供でも出来る。広大な大地にグッドパターンを形成したのは、開拓しやすかったからかもしれないが、おかげで、その後の開発も整然と出来た。散居型の住宅は、行政サービスを考えると、集居型に成らざるを得なかったが、これも農地の集積には功を奏した。とにかく北海道のようなスケールメ리트を生かした農業は、日本の財産だと思う。少子高齢化が進み、どの産業も人材不足だ。行政サ

ービスや産業システムが機能不全となる中、この町を魅力ある町にしたいと思った。農業を基幹産業としつつも、農業に縁の無い人たちにも親しみやすさを持ってもらう。外国人労働者が沢山入り、日本が日本らしくあることが、当たり前ではない時代に、先人の築いた風土や文化を守りつつ、新たなコミュニティを形成する。それを思いつてこの町に住み、あつという間に25年程が過ぎた。『少しは役に立てたのかな？』50歳を目前に、時々振り返ることがある。
「この町の人口が増えたのは、それだけじゃないよ……。」と心の中で呟いた。

* * *

その時、突然、カーナビから、「自宅二電話ガ入りマシタ。転送シテヨロシイデスカ？」とメビウスの声が聞こえた。

「誰から？」とミキが聞いた。
「電話番号ハ、オジイ様ノ自宅ノ番号デス。声紋ハ、オ母様ト一致シマス。」
「いいワ。つないで。モシモシ？」
「アラ。ミキも一緒なの？お父さんは？」と、お母さんの声が聞こえた。
「お母さん！どうしたの？大丈夫？端末に応答してくれないから心

配で、今、お父さんと一緒に、お母さんの現場に行くところよ。」
「あら、そうなの。ゴメンネ。でも私、今、現場に居ないの。おじいちゃんの家で居るのよ。」
「エッ?!」車中の2人は顔を見合わせた。

* * *

それから20分ほどで祖父母の住宅に着くと、母と祖父母が笑いながら出迎えてくれた。

「雨の中、ご苦労様です。」とおじいちゃん。母が

「雨はもう上がってるわヨ。」と横槍を入れる。

「いやあ、ご無沙汰してすみません。」と父が答える。

「いやいや、あなたはお忙しいから大変でしょう?毎日の様にミキに来てもらって、楽しくやってますよ。」

「お母さん、どうして端末に応募してくれなかったの?」とミキ。

「そうそう。雨の中で現場を巡回している時に、手を滑らせて落っことしたの。当たり所が悪かったみたいで、端末壊れちゃった。」

「モウ、何やってんの!それだ?」「それから、現場が終わったので、おじいちゃんたちの顔を見に来たって訳。」

「お母さんの車、どうしたの?」

「それがネ、雨がひどかったでしょ?あの中をゆっくりモードで走ったんだけど、エンジンに水が入っちゃったかも。ここに着いたとたん、電気系統がダウンしちゃったの。」と母が答えた。続けて、

「ホントにツイてないのよ。それで、おじいちゃんの家からお父さんの端末に電話したら、出ないじゃない?だから家に電話したら、今度はメビウスが『留守番モード』だった。」

「えっ?俺に電話?」

「そうよ。電話したわよ!」

「あれ、端末が無い。」

父が慌ててポケットを探るが、無い。車の中にも見当たらない。

「そうか...自宅で洗面所に行つて顔を洗った時、財布と免許証に気を取られて...不携帯、申し訳ない。」

「まったく。似たもの夫婦なんだから!」ミキの鋭い一言で爆笑になった。

「端末と車。大損害よ。でも建築中の家は大丈夫だったから、良かったワ。」

「申し訳ない。端末データは?」

「大丈夫。全部クラウドだから。あれは只の入口の役割だけよ。」

「そうだったね。」

「ところで、ミキちゃん。明日は楽しみだね。」

「あら、だめよ。おじいちゃん、内緒なんだから。」

「え、何?内緒?」とミキ。

「もう、ばれちゃったわネ。」

ミキ以外の四人は、クスツと笑って、母が言った。

「え、と、誰かさんの誕生日だなんてことは無いわよネ?そうそう、この町のお祭りよね。花火大会もあるし。」

「ヒツドイ。意地悪。」

「うそうそ。ちゃんと覚えているわよ。ねえ、お父さん。」

「ああ、明日は新しく出来たレストランを予約しておいた。この町で取れた食材で料理をする、農業法人の直営店だよ。その会社に勤める人が、交代で接客や、野菜の直売もやっているんだって。」

「ホント?行つて見たかったの。ラツキ。」

「ところでお父さん、すごい雨だったけど、被害は出なかったの?」と母が尋ねた。

「そうそう、私も心配していたんだよ。災害レベルの降雨量でしたね。」おじいちゃんも、技術者の血が騒いだようだ。

「ええ。大丈夫。シミュレーションどおりでした。もともとこの町の開発計画が出た時から、事前に対策を兼ねて造成していたので、水利施設も、道路やほ場も何の被害も出ていません。」

「そう、よかったわ。じゃあ、おじいちゃん、あばあちゃん。また明日。迎えに来るわね。」母の声をきっかけに、今日の所は母の車をおじいちゃんの家で停めて解散となった。

* * *

車が家に着き、玄関に入ると、メビウスの声が、迎えてくれた。

「才帰リナサイマセ。ぱすたそーすヲ作ツテオキマシタ。ぱすたヲ茹デレバ完成デス。留守番モードヲ解除シマスカ?」

「留守番モードを解除して。でもパスタも茹でて頂戴。私も疲れちゃったワ。」と母が言った。

「メビウス。サラダも付けといてね。」ミキが得意げにメビウスに命じた。

祖父母も、あの住宅で生き生きと暮らしている。『おじいちゃん、相変わらず技術者だったな。』と思つた。そして、

「やっぱりこの町、好きだな。」

ミキは呟いた。(終)